

福島復興から日本の立て直し探訪

会津から 復興へ 近江

— 横田俊益伝 —

その

5



旅の案内人：神奈川県在住

大橋 しのぶ

まほろば宮下社長のルーツ案内記

前回までのあらすじ

二〇一五年五月、まほろばの宮下社長と、母方の先祖が同じ福島県・会津若松である事が分かりルーツ探しのお手伝いをする事になりました。

七月、福島県二本松市で講演会をされるという奥様の日程に合わせて会津をご案内する事になり、初日は倉田本家の跡地にあるイタリアンレストラン・ルーチェ、二日目の午前中は甲賀町口城門跡、御祖母様の出生地などをご案内しました☆☆☆

戊辰戦争百五十年の節目

甲賀町通りを北のどん詰まりまで散策したので、次は蚕町通りを西に進み、馬場町通りに向かいました。

七月の会津は、盆地のせいもあり蒸し蒸しとした暑さが襲ってきて、道路にはゆらゆらと陽炎が立っています。この道を、百年前には松平容保公が、白虎隊士が、そして攻めて来た西軍達が走り抜けたのだな、と幕末時代に思いを馳せながら歩き、今度の東京オリンピックの前に、戊辰戦争の一五〇年目という大きな節目が来るのだと思ひ出



土津神社

しました。そして戊辰戦争百四十年目の頃に起こった東日本大震災や原発事故の事を考えました。

時代の節目というのとは全く色々な物事が起こりやすいもの。どうか今回は何事も起こりませんようにと、会津や福島を守り神である土津神社（会津藩の初代藩主・保科正之公が祀られている）の方向に向かって心の中で手を合わせました。

馬場町検断の倉田家

さて馬場町通り（旧・馬場名子屋町）に着くと、今度はその通りを北から南に向けて市街地の方に戻っていき

ました。十五分ほどぶらぶら歩くと、倉田家の分家である、馬場町検断の倉田邸跡に着きました。

こちらの倉田家は大町札の辻の倉田本家三代目実政の次男・倉田儀兵衛義茂が馬場町

に分家した場所です。義茂は馬場町の検断に任命され、子孫は明治初めまで十代にわたり、その職を勤めました。そして平成

十年、倉田和夫、

俊秀、昌治の三氏により、土地建物が会津若松市に寄贈され、馬場町倉田家の人々は東京に移住されたとのことでした。

今この場所は「特定非営利活動法人ファミリー・サポート・あいづ」の事務局として使われ、会津の子育てサポート事業の一環を担っています。

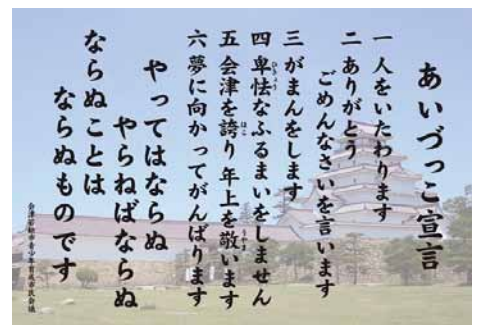
リビングの壁にはあいづつこ宣言が掲げられていました。

会津藩士の子弟たちは、藩校である日新館に入学する前の六歳から十歳までの四年間、町内の区域を分割した「什（じゅう）」というグループに組み込まれました。そこでは階級差別はなく会津武士道の礎とも言える、「ならぬことはならぬもの」という、「什の掟」の精神が叩き込まれました。

あいづつこ宣言はそれを現代版に直して、青少年の健全育成を目的として作られました。小学校で暗唱するので、会津の子供なら誰でも言えるはずです。

くならぬことは
ならぬものです

このセリフを大河ドラマ八重



の桜の中で主人公の八重さんもよく言っていたので、聞き覚えのある方も多いと思います。会津人の一徹な気質ををよく表しています。

この馬場町検断の二二代目、倉田留八郎は、倉田家の家譜を明らかにしようという熱意を持って、明治三五年にはるか遠い近江にまで調査旅行に行きます。そしてその父の遺志を継いだ、四男・秀治、五男・元治が九年の月日をかけて「倉田氏家譜」を著す事になります。

昨日、会津図書館の職員の方に、

その資料の閲覧をお願いしておいたので、馬場町の旧倉田邸を後にして会津図書館へと向かいました。



横田三友俊益と稽古堂

会津図書館の入っている、会津若松市生涯学習総合センターは会津市民の交流の場として二〇一一年四月にオープンしました。外観は情報を集積するだけでなく発信していく「学びの蔵」をイメージしていてニッケネームは「會津稽古堂」と言います。実はこの「會津稽古堂」という名称は、倉田家出身の横田三友俊益という学者が開設した、江戸期における日本初の民間教育の学舎である「稽古堂」からきています。

横田俊益は元和六年（一六二〇年）正月十六日、大町札の辻の西南角の家に倉田俊次の長男として生まれました。生家の斜め向かいが本家の倉田家になります。

横田俊益は、まぼろば・宮下社長が若い頃、漢籍に親しみ、中国哲学を学んでいたこともあり、倉田家の先祖の中でも特に親近感を抱かれています。

ありますので、ちよつと紙面をさいてその人生をご紹介します。

これまでも何回かご紹介し



た通り、会津倉田家の祖である倉田為実（なまざね）は近江国・日野甲賀町より会津にやって来て検断となり大出世した商人です。その為実には男子がなく二人の娘がいました。そこで為実は姉の龍（たづな）には山内半左衛門の息子・実充を婿養子として迎え検断職を譲り、妹の徳（とく）には、山内俊貫の息子・俊次を婿として本家の斜め向かいの土地に分家させました。

どちらの娘にも別々の山内家から婿を取っているのです。きつと山内家とは何かが縁のある間柄だったのでしよう。特に俊益の父である俊次が倉田家に婿入りするに至るまでのエピソードは興味深いです。

俊益の父親・俊次の願い

俊次の十九代前の遠祖・山内経俊は元々は鎌倉・山ノ内を本貫の地とする武士で、源頼朝により会津大沼郡横田に封ぜられました。それ

から約四百年を経た天正十七年（一五八九年）、共に源頼朝公から会津に封ぜられていた芦名家が伊達政宗によって滅ぼされます。そして翌年、天下統一を果たした豊臣秀吉は伊達政宗を退け、蒲生氏郷に会津全領を与えました。その結果、頼朝公以来四〇〇年に及んだ山内家の所領はことごとく蒲生氏郷の物

となり、山内一族は四方に離散の憂き目にあいました。俊次の父・俊貫は、会津大沼郡滝谷の城主でありましたが浪々の身となり、常陸・越後・福島の間を漂泊する事となります。その時、俊次は一三歳。母と一緒に柳津円蔵寺の奥院に身を寄せることになりました。程経てそれを知った、会津検断職の倉田為実が俊次の人となり且つ家系の歴然たるを知って、彼の父親である俊貫に乞うて、自分の次女である徳の婿として俊次を迎えることにしたのです。

柳津円蔵寺と言えば、倉田為実が若き日に兄と一緒に一〇〇日の祈願をして満願の日に神秘体験をしたというあのお寺です。為実はその故



に会津に永住する事を決めて、その後も円蔵寺に報謝を怠らなかつたという話ですから、きつとお寺のご住職あたりから俊次親子の不遇の話などを聞いたのでしょう。これもまた倉田家にご縁のある柳津虚空蔵菩薩様のお導きなのでしょう。

婿に入った俊次は徳との間に女二人、男二人を設ける事になります。

その三番目の子供として誕生したのが横田俊益でした。俊次は倉田家の財力をバックにして息子の俊益に幅広い教養を身に付けさせます。

当時会津の名僧と言われ、後に京都妙心寺の住職にも栄転した、広徳寺代三十三世である住職逸伝を、俊益が三十四歳の頃から家に招き共に説法を聞かせ、九歳の頃には修験道の正善院、真言宗の連城坊などと呼ばんで般若心経、観音経を習わせ、次いで法華経八巻をも転読させました。

儒教方面では十三、四歳の頃から儒医田中学内に四書を、葛岡玄興からは詩経を、興徳寺長老からは三体詩を、成願寺長老鉄額からは論語を、服部丹斎からは錦繍段詩集を学ばせました。他にも十一歳からは連歌、点茶の法、謡曲をも習わせ、十五歳からは加藤家の家老堀主水より剣を、家の奉公人からは薙刀を習わせました。

このように俊益は当時考えられる最高の教育を与えられるのですが、他ならぬ父から、人生の方向性を決定する先祖の話聞いたのは寛永六年（一六二九年）十歳の時のことでした。

俊次いわく、

「父はもとは山内の一族で、滝谷・檜野原は皆わが先祖の城であった。

しかるに一族は浪々の身となり、父（俊次）も壮年、倉田道拓（為実）の婿となり、その家を継ぎ倉田姓となった。汝こそは本氏を継ぐべきである。姓は山内といつても横田といつても、汝の好みにまかせる。文字の美しい点では横田氏が勝れている。また「俊」の字は我が家共通の文字であり、「益」の字は形が正しく意味も「吉祥」の意味があつて目出たいから、只今から汝の名は三平を改めて「俊益」と言ふべきである。

父は今、市中にあつて貨殖を業としているが、心中財は貴ばない。（中略）

我は幼児から昼間に浪々して衣食につとめてきたから文字を知らない。今これを悔いても及ばない。汝は是非、書を読むべきである。読書して才があれば他人はこれを見捨てることはない。父は汝の為に書を買うのに金惜しみはせぬ。そもそも身につけた財は時には無くなることもあるが、心につけた財は減することはない。父が今、書物のために金を出すことは無駄ではなく、汝の為に宝蔵に金を納めることだ。学を学べば近くの人は道を知り、遠くは天地の理を極め得るので、人生の至楽といわねばならない。その為には父は紙の衣を着、菜食をするも悔やみはしない。」

こうして俊益は倉田姓から横田姓に改め、幼名の三平から俊益と名乗る事になったのです。俊次は流浪の生活で文字を学ぶことすら出来なかったので、その分、息子には学問を身につけさせたいと願ったのですね。その為ならば紙の衣服を着て粗食の生活をすることも厭わないというくだりは俊次の父性愛をひしひしと感じます。

母親の徳からも「必ず学を廃することなかれ」と常に戒められ、俊次と共に柳井津虚空蔵尊の奥の院に身を寄せていた俊益の祖母も「父名を揚げて山内氏を顕わすのは、この児である」と言つて常に俊益を愛しました。

そんな両親や祖母の期待と愛情を一身に受けて育つた俊益はその期待に応えるがごとく、広く学問の道に入つていき、やがて「会津の鴻儒」と呼ばれる大儒学者となります。またその人生において、時あるごとに祖先を祭り、墓石を建て一族の戦跡を訪ね、失われた先祖の地の事績や古跡が忘れ去られてしまふのを惜しみ、「山内天正記」を著し、「山内横田系譜」を作成するなど祖先に対する報恩も欠かしませんでした。



俊益と加藤明成公

俊益は生まれつき容貌が美しく、九歳になる頃には般若心経、観音經などを暗唱しているのが評判となり、時の会津藩主である加藤嘉明より「稚児小姓」になるようにと要請がありました。父・俊次は「年があまりに若い」と言つて辞退しますが、翌年、加藤嘉明が病にかかった時に藩命で小使役として召し出され「身体も精神も並み並みの者ではない。」とさらに評判となりました。

加藤嘉明が没すると、子の明成はたびたび俊益を召し出し、古謡を歌わせ、書を書かせ、三略を読ませ、または茶菓を供えさせて起居動作を観察し、稚児小姓になる事を要請しました。しかしこの時も父・俊次は祖母の喪中であるのを理由にそれを辞退しました。



加藤明成公

う。ただ汝の欲するところに進んでよい。」といわしめました。俊益は喜んで随行を決め、江戸で林羅山をはじめとする、日本第一の大学者達の指導を受けるといふ機会に恵まれたのでした。

宮下社長から度々出る中国古琴のお話。朱子学者となつた藤原惺窩やその弟子の林羅山らが、湯島聖堂の前身、昌平黌学問所を開き、俊益もそこで琴学に触れた可能性があり、その影響が世代を超えて伝わっていたのかもしれない。



俊益二十一歳の正月（一六四〇年）には、明成は会津の俊益宅にて「不時の茶会」を開き、時の藩主を自宅に迎えるという榮譽に、父・俊次や徳をはじめとする親戚一同はなすことを知らないというほど喜びました。

その二年後、明成が病を得ると俊益は衣帯を解かず、側で看病をし、他の者ではつかみ得ない明成の言葉を解して重宝されました。そして五月ぶりに明成が平癒するとその労を賞して黄金と衣を拝受したのでした。このように俊益が明成に仕えることは七年に及びました。

寛永十六年（一六三九年）、会津騒動とよばれるお家騒動が起こり、寛永二十年（一六四三年）加藤明成は改易処分となります。それと同時に俊益はお役御免となりました。

そして加藤明成の後には、いよいよ名君・保科正之が信濃の高遠藩から最上山形藩を経て会津にやってくることになるのです。

保科正之公の侍講となる

加藤家からお役御免となった俊益は自己の身の振り方を考えた末、父母にこう言います。

「弟の俊親は、年すでに十七、八歳になり、姉の嫁した木村久哉もいることだから、家のことはこれらの人に任せ、私は江戸に出て学問で身を立てたいと思う。」

父母もこれに賛同し、江戸に家を買って学問に励むようにと言って、黄金三十両を授けてくれました。

俊益二五歳、青雲の志を持って江戸に登り、家を探し始めます。

この頃には俊益の評判は江戸中に広がっており「当世、学者は多いが俊益の如きは稀だ」と言われ、あちこちの藩から士官の要請がありました。だが、彼はすべて断りひたすら学問に専念しました。しかしそんな俊益の身に晴天の霹靂というべき事態がおこります。わずか九ヶ月前に元気で別れた弟が病に臥し、若千二〇歳にしてあつてなく亡くなってしまうのです。さすがに氣落ちした父母は俊益にこう言います。

「私は子供は多かったが、男の子は二人だけ。その一人が今死んだ。汝は学問をあきらめて我が悲しみを慰めてくれ。」

俊益は「はい」の一言ですぐに江戸を引き払い会津に戻ってきました。

会津に帰ると、すぐに家老の成瀬主計から士官の要請がありました。成瀬氏は以前共に加藤明成に仕えた同僚でした。しかし俊益は、「私には士官の意はありません、成瀬氏によろしく」と辞退します。そしてひたすら孝養に励みつつ読書と思索の日々を過ごします。

成瀬氏は諦めきれず、翌々年もその次の年も三度に渡って士官の要請をしますが、俊益はことごとくこれを断ります。よほど宮仕えが肌に合わないと感じていたのでしょうか。

前藩主の加藤明成は俊益を破格の待遇で愛しましたが、偏愛が過ぎる

というか、ちょっとした誤解から、朝夕側を離さなかった俊益を三か月も無視し続けた時もあり、また家老の堀主水とトラブルを起こし、それが幕府や高野山を巻き込んだ会津騒動という大事件に発展し改易へと繋がって行くので、あまり名君とは言えない人物だったようです。もともと学究肌で理想主義傾向の強かった俊益にとつて宮仕えは疲れることの方が多かったのではないのでしょうか。

ということ、なかなか首を縦に振らない俊益を士官させるために、ついには大老の田中正玄が乗り出して説得にあたる事になりました。正玄はさとするように俊益に話しかけます。

「この国に居て、その身を勝手にすることはよくあるまい」

俊益は答えました。

「前に太守（保科正之公）が儒学を愛好され私をお召しになったが、不才の私に歴史を講ぜよと仰せ遊ばすなら、私はその器ではありません」

「心配はご無用。太守は儒学がお好きであるが、側にあって話相手のないのを淋しく思っている。汝が太守の側にあってお慰め出来れば幸いである。」

「私は体が弱く、長い間君側に奉仕することは健康上できないので、疲れたらいつでもお暇

がいただけますでしょうか。」

「それで結構、それで結構。心配の要はない」

これ以上は辞退できないと観念した俊益は、大老田中正玄直々の説得により、ようやく士官を了承したのでした。

会津藩の名家老として知られるこの田中正玄のご子孫の一人、磯深雪さんが、北海道札幌に在住していて、まほろばのお客様として長く宮下社長とご交流があるというのも本当に不思議なご縁ですね。

翌・明暦二年（一六五六年）六月、俊益の元に江戸から二百石を賜う目録が到着しました。この時俊益は三七歳、始めに成瀬氏より士官の要請があつてから何と一三年も経っていました。

その一三年の間に俊益は藩医・服部寿慶の娘、久里と結婚をし、医師を学ぶため義兄と一緒に京都に一年間逗留したりしますが、その

際、祖父・為実の出身地である甲賀水口の親類の家にも立ち寄っています。（何と、この甲賀水口にまほろばのお客様が居らしたとか）



近江国甲賀水口付近

倉田為実が会津で大出世したことは故郷の甲賀でも広く知られていたようで、為実の妹は兄を訪ねてはるばる会津や仙台までやって来たそうです。俊益のあたりまでは会津倉田家と近江倉田家の間で交流が盛んだったことが分かります。

しかし世代が変わり時代が進むにつけ、徐々に交流は途絶え江戸時代末期には、ほぼ絶交となっていくようです。しかし明治期になって馬場町の倉田家に婿入りした留八郎が家の歴史を残すために甲賀まで調査旅行に行き、再び交流が始まる事になるのは先にも少し述べたとおりです。

俊益は会津にいる時は、請われるまま、庶民を相手に自宅や寺で論議や中庸を講じはじめますが、評判を聞きつけた聴衆が寺に入りきれないほど集まってきて門外まで溢れ、周囲に迷惑がかかる事を慮り講義が中止になった日もあったそうです。後の私塾・稽古堂開設に繋がるようなエピソードです。

さてついに正之の侍講となった俊益はたびたび会津から江戸屋敷に召され、正之やその息子達、諸臣数十名を相手に詩経の講義などを務めます。

詩経三百篇の講義を聞かれた際、正之公は葛覃篇と秦風黄鳥篇に最も



公正之保科

心を動かされました。秦風黄鳥篇は秦の穆公が崩じた際、三人の賢者が殉死をした事を悼んだ詩で、正之公は殉死は不仁不知の野蛮人の風習であることを語り、詩中の「穴に埋められるとき泣き恐れる」という箇所では非常に嘆き悲しまれたそうです。名君・保科正之公の情深さを伺わせる逸話です。

その三年後（一六六一年）、正之公は会津藩内において殉死の禁止令を発布し、さらにその二年後は幕府もそれに倣うように全国に殉死の禁止令を布きます。これは常に將軍綱吉公を立て、自らの功績を決して表に出そうとしなかった保科正之公の隠れた善政の一つ（徳川三百年中最善政の一つともされる）であります。さらにその正之公の陰には横田俊益の詩経講義の功績があったのです。

俊益は詩経の講義がひと段落すると病の為に侍講を辞して会津へと帰っていきます。

寛文二年（一六六二年）、俊益四三才のことでした。

稽古堂の設立

俊益は会津で静養しつつ、肥前から会津にやってきた僧侶如黙と親交

を結び、共に漢詩和歌を作詩する日々を楽しみました。

そして寛文四年（一六六四年）閏五月、俊益四五歳の時、若松桂林寺の北端赤岡の地に江戸時代で初めての民間教育の機関である「稽古堂」を設立することになるのです。この種のものでは岡山藩の花畠教場や藤樹書院などもありますが、これは藩の力が加わったもので、藩の力によらず庶民が作ったものとしては「稽古堂」が最初のものでした。

俊益が講堂の設立を提唱すると、喜びに沸いた四民の子弟数百人が金銭を出し、力を合わせて「稽古堂」が建設されました。

江戸時代初期のこの頃は戦国時代の風潮が残り、藩校と呼ばれる学校はまだ存在しておらず、本格的な学問を志すものは出家して僧侶になるのが一般的でした。

そんな中、藩命によらず庶民の力だけで設立された稽古堂は我が国の近世教育史上特筆されるべき事例であり、後に設立される、全国でも最高の学力水準を誇ったという会津藩校・日新館の源流ともいえる学問所なのです。

学ぶ事に飢えていた四民が身分の垣根を越えて、お金を出し合い、共



に自らの学び舎を作り上げいったのだと思うと、とても胸が熱くなります。

校長には俊益の友人の僧侶、岡田如黙をあてました。稽古堂は校長如黙の下に二、三人の助手がいて、講義は月に二回、ないし六回おこなわれ、儒教をはじめとして、詩文、和歌、医書なども加わりました。

学問を奨励していた正之は、稽古堂の設立を喜び、税を免じ校舎の修理費を与え、如黙には菜園と給料を下賜されました。

寛文四年に俊益が庶民に請われ論語を講じた時には、大老の田中正玄をはじめ、城内の諸役人、医者、僧侶、農工商の者にいたるまで聴衆は堂に溢れ下駄は堂外に乱れたほどの盛況であつたそうです。

このような会津人の好学の風潮は、徳川家康の文教政策はもちろんのこと、藩祖、保科正之公が非常に学問好きで自らも学びそして人にも勧めたこと、そしてその侍講を務めた俊益が稽古堂ができる二十年も前から庶民に儒教を初めとする学問を講じていた功績も大きいとされています。俊益が「会津藩教学の祖」と言われるゆえんです。

藩命による学問所としては二代藩主の

保科正経が延二年（一六七四年）本一ノ丁甲賀町東北角に、読書所と呼ばれる武士を対象とする学問所を設けました。元禄二年（一六八九年）この読書所は甲賀町口東北の角に移設され、庶民も入学を許される町講所という学問所へと発展します。

その際、稽古堂は街はずれにあつて庶民の通学に不便だという理由もあり、この町講所に吸収合併される事になりました。俊益の設立した稽古堂は、事実上その時に閉鎖という形になりました。しかしこの学び舎は設立以来二六



年という長きに渡つて会津人の庶民教育に多大なる貢献したのです。そして稽古堂という名称は三二二年の時を経た二〇一年に、会津人の教育の場所である会津若松市生涯学習総合センターのニックネームとして「會津稽古堂」の呼び名で復活したのです。

四民が等しく学問を学ぶ喜びが、三〇〇年もの長きに渡つて会津人の心の中に生き続けていた証と言えるでしょう。

再び正之公の侍講となる

寛文二年（一六六二年）四三歳の時に、健康を害し侍講を辞していた俊益でしたが、江戸で幕政に携わっていた正之公は俊益の去った後、淋しさに堪えず、健康はまだ回復せぬかと家臣にたびたび尋ねられていました。

寛文六年（一六六六年）、正之公の側用人から俊益宛に書状が届きました。内容は、

「太守（正之公）は幕府から隠居の許しが出たなら学問を娛しまれる御考。そのため侍講を求められ、汝のことを話に出された。近く家老友松氏興が会津に行つて、汝に再任を進めるから命に従え」というものでした。

九月下旬、江戸家老の友松は会津に帰り、大老の田中と打ち合わせ俊益に再任を進めました。その時に俊益は自身の希望をこう述べました。

「私の祖先は大沼郡金山谷、滝谷の城主であつたが、天正の乱（伊達政宗の会津侵攻）で、鎌倉右大將以来の封土は理非を問わず、大となく小となく悉く蒲生氏郷の所領となり、私の父俊次は一三歳の身で浪々の身となり、成年になって会津若松

城下の検断倉田氏の婿となった。私は幼少から文を学び、常に祖先の悲運を慨いていたので、今、幸に太守の庇護によつて微賤の子孫である私が祖先の業を継ぐ事が出来れば、これ以上の嬉しさはない。ただ私には八十余歳の老母がいるので、これを棄て去ることは出来ない。もし一子に老母を養わせ、私は別に太守の禄を受くことが出来れば、恩義を全うすることが出来る。何とぞ私に士騎馬を養うに足る禄と家屋とを賜らば、これ以上の幸はない」

大老田中正玄と友松家老は相談して俊益に系図を提出させ、これを正之公に奉ったところ、直ちに希望は聞き入れられ、三百石と一ノ丁の屋敷を賜うことになりました。寛文七年（一六六七年）三月、俊益四八歳の時の事で、約五年ぶりに正之公の侍講となつたのです。

俊益は前回も二百石を拝受していますが、この度の再任要請により、今こそ祖先の偉業を語り伝え、横田家を再興したいと願つたのでしょう。俊益が常に祖先の事を考えていたことが分かる逸話です。

その年の八月、正之公のお召しによつて俊益は大老の田中正玄と共に江戸にあがります。俊益が得意の「通鑑綱目」を進講すると正之公は非常に喜ばれ、「これから大切な箇所は

指示するから抜書として別冊を作れ」と仰せられたほどでした。

俊益が静養を理由に侍講を辞した寛文二年の前年あたりから、実は正之公も健康を害し始めていました。寛文元年には眼病を患いその後失明します。寛文二年には血も吐かれました。よつてたびたび隠居願いを幕府に提出していたのですが、將軍綱吉は正之公が隠居する事を心細く思ひ許されずにいた状況でした。そんな中、俊益が侍講として戻つてきてくれて、学問好きの正之公はどんなにお喜びになった事かと思えます。江戸に上がると俊益は日々正之公の側を離れず講義を進めました。

やがて俊益が侍講に再任して二年が過ぎた寛文九年（一六六九年）九月、ようやく幕府から正之公に隠居の許可が下り、公は髪を短くして道服を着られたのです。

隠居してから正之公の学問はますます盛んになり、俊益はたびたび江戸に上がり、中国の歴史書である通鑑綱目の講義を行います。

それは正之公が亡くなる直前まで続くことになるのです。

寛文十二年十月二十七日、正之公は風邪にかかり、十一月二十五日には病床に臥しました。

これより病状は一進一退を繰り返し、ついに十二月十八日の未明、会津の誇る名君、保科正之公は江戸の

箕田邸にて六十二歳でその生涯を閉じたのでした。

正之公は薨去の十一日前の十二月七日まで、俊益に枕元で通鑑綱目を講じさせました。

既に自分の死期を悟っておられたのでしよう。

「吾は通鑑綱目の講を全篇聞くことは望めなくなった。今、後漢篇まで聞いたが、生前もし蜀漢まで聞き得ば満足だ。」

と言われました。

結局そこまで聞くことは叶わず、延熹九年の歴史を最後に公は身罷られました。しかし、失明をしても病気になるでもなお、死の寸前まで正之公の学問に対する熱意がいささかも衰えなかったには驚嘆すべきことだと思います。

会津若松の町並み

現代の会津案内に戻ります。会津図書館で「倉田氏家譜」を閲覧した後は、倉田家の菩提寺である阿弥陀寺へと向かいました。そこで途中にある野口英世青春館に立ち寄ることにしました。ここは会津猪苗代出身の偉人・



野口英世青春館



野口英世が左手の手術を受け、それがきっかけで医学を学ぶ事になった旧・会陽医院です。

二階は資料館、一階は喫茶店になっていますので、二階を見学した後は一階の喫茶店で小休止をすることになりました。

野口英世青春館はイタリアンレストラン・ルーチェさん同様、明治・大正ロマン溢れる素敵な建物なので、

会津若松にお越しの際は是非立ち寄っていただきたい場所の一つです。

野口英世青春館で美味しい珈琲をいただいた後は、清水屋旅館跡やレオ氏郷（蒲生氏郷）南蛮館の前を通り過ぎ、七日町通り沿いを西に向けて

一路、阿弥陀寺を目指して歩きました。

この清水屋旅館には多くの歴史的人物が宿泊しました。

幕末の志士達に多大な影響を与えた吉田松陰は嘉永五年（一八五二年）

二二歳の時に東北各藩を歴訪する大旅行した際に会津藩も訪れ、清水屋旅館に宿泊しました。松陰は会津藩



の藩校・日新館に特に強い関心を示し、二度に渡って訪問し見聞を広めたそうです。後に松陰が設立する松下村塾の参考にもなったのではないのでしょうか。

また新選組の土方歳三や、同志社大学設立者の新島襄やその妻の山本八重も会津を訪問した際はこの清水旅館に逗留しました。

他にも会津若松市内は古い蔵を改装した趣のある郷土料理や伝統工芸の店、酒蔵などが豊富にあります。歴史とグルメの町、会津若松に、ぜひ一度、遊びに来てください。

阿弥陀寺と倉田家

会津若松市内でも、もっとも有名で大きなお寺である阿弥陀寺は、会津倉田家の祖である倉田為実が施主となって建立されました。もともと倉田家は熱心な浄土宗の信者であり、阿弥陀寺の名称も為実の故郷、近江国日野町の阿弥陀寺から命名したと言われています。為実は後に剃髪して道祐と号します。

ちなみに宮下社長が、浄土宗の流れの光明主義創始者、山崎弁栄聖者に傾倒されたもの、その血筋が流れているからかもしれません。

また俊益の父・俊次も寛永三年

（一六二六年）、四九歳の時に、会津に布教に来ていた遊行上人に出会い剃髪して泡興と号したほど熱心な仏教徒でした。

偶然にも遊行寺は私が今住んでいる神奈川県藤沢市のマンションから一キロと離れていない場所にある時宗の総本山です。毎朝寝室の窓を開けると、遊行寺の伽藍が見え、それを囲む緑の森の香りが朝の風に乘って、心地よく部屋に吹き込んできます。

ですので、倉田俊次さんがこの遊行寺に帰依していたと知ったのは、ちよつと驚きました。だいたい倉田家の人々の生涯や人柄、そして色々な繋がりが分かってきたので、最近ではとても他人のご先祖様とは思えなくなってきたくらいです（笑）。



阿弥陀寺

阿弥陀寺に到着すると、さっそく倉田家の資料を片手に、寺の裏側の墓所に回り、倉田為実夫妻のお墓を探しました。

しかし地図にあるべき場所に何故か墓石が見あたりません。ぐるぐると何週かしてみたのですが、どうしても見つかる事ができませんでした。もしやあまりに古い墓石なので処分されてしまったのかな？と不安になりました。現にこの阿弥陀寺は私の先祖・石井家の菩提寺でもあったのですが、石井家が斗南藩に移った事や、明治大正期に敷地内に線路が通る事になった際に、古い墓石は墓所から撤収されてしまいました。でもまさか阿弥陀寺の建立者である倉田家の墓石を撤収する事はないでしょうと思いつつ、お寺の正面に回ると、阿弥陀寺の関係者らしい方が掃除をしていたので倉田家の墓所がどこかを聞いてみました。するとその方はお寺の真正面にある立派な五輪塔の一群に案内してくださいました。

何と、数年前にご住職が亡くなられた昨年新しいご住職が就任した



際に、阿弥陀寺建立の立役者である倉田家の墓石等をお寺の正面敷か所に移動したそうなので

倉田家の墓所は予想以上に立派な五輪塔が建っていたので驚

きました。近江からはるか会津までやって来て、ついには阿弥陀寺まで建立してしまった倉田為実さんの偉業が偲ばれるような墓所でした。宮下社長もとても驚き感激されていました。

阿弥陀寺は戊辰戦争の際に多くの戦死者が埋葬されたお寺としても有名です。千三百人もの死者が深い穴に入れられましたが、ついには穴に入りきらず、仕方なく積みあがった遺体の上に土が盛られたそうです。そこは東軍墓地として毎年春秋のお彼岸には慰霊祭が執り行われています。

また元新撰組三番隊長として有名な斎藤一の墓所もこちらにあります。

阿弥陀寺の後は、馬場町倉田家の墓所がある興性寺や末廣酒造なども巡りました。

ここでやっと遅いお昼ごはんを

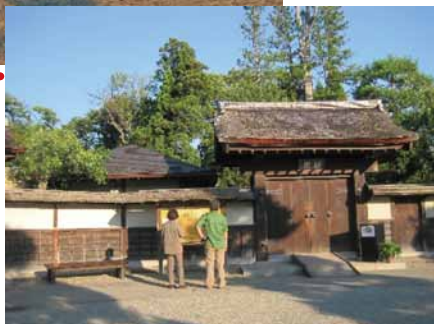


食えることにして、満田屋という郷土料理のお店に入りました。ここは囲炉裏端で田楽を直火にあぶって、自家製味噌を付けて食べるお店です。

夏の会津での囲炉裏端はかなり暑かったですが、トコロテンも注文し、歩き疲れた体にはどちらもととても美味しかったです。

鶴ヶ城と再び阿弥陀寺へ

満田屋を後にして、遅れて会津にやって来た奥様と合流する為、会津若松駅へと向かいました。明日は二本松で奥様の講演会が開催される事になっているのでした。



茶室・麟閣

奥様と合流すると、まず会津の誇る名城・鶴ヶ城へとご案内しました。堅牢な石垣と美しい赤瓦のお城は予想以上に素晴らしかったらしく、宮下社長は「ここは来て良かった！」と喜んでくださいました。

確かに昨日から、ちよつとさびれた町はずれとか、お寺とかお墓巡りが多かったのだ(笑)。

会津の代表的な観光スポットもご案内できて良かったと思いました。

宮下社長と奥様は敷地内にある千利休の子・少庵が建てたと言われる茶室・麟閣も熱心に眺めていました。(『一期一会』参照。まほろばだより2016年6月)

千利休が秀吉の怒りに触れて死を命じられた際、蒲生氏郷は利休の茶道が途絶えるのを惜しんでその子、少庵を会津に匿い、その後徳川家康と

共に千家復興を秀吉に働きかけました。

その結果、少庵は京都に帰って千家を再興し、千家茶道は一子、宗旦に引き継がれ、その後、宗左・宗室・宗守の三人の孫によって表

裏、武者小路の三千家が興され、今日の茶道の基が築かれました。そういう意味では会津は茶道の伝承に大きな役割を果たしたとも言えるのです。小庵が会津に匿われている間、氏郷のために造ったと伝えられているのが「麟閣」であり、以来、鶴ヶ城内で大切に伝えられてきました。

鶴ヶ城の後は、妻にもぜひ阿弥陀寺の倉田家墓所を見せたい、という宮下社長のためのご希望で再び阿弥陀寺へと戻る事になりました。夫婦で同じ感動を分かち合いたいという宮下社長のお言葉には心打たれました。

横田俊益の晩年と小田山

横田俊益の墓所は阿弥陀寺でも興性寺でもなく大窪山という場所にあります。大窪山は鶴ヶ城の南東約二、三キロ程の場所にある会津藩士の共同墓地です。保科正之公は神道の教えにのっとり土葬を奨励されたので町中の寺社墓地では間に合わなくなってしまうのです。大窪山は草木美しく万山黄土層で埋葬に適しており、約四千から一万人の藩士や商人が眠っているとされており、会津の人物研究には無尽の宝庫とも言われています。

さて、俊益は杖とも柱とも思っていた保科正之公が亡くなると、にわ



かに隠棲の気持ちが強くなり、公の葬儀が終わると、妻と共に隠棲の地を探す為に大窪山の近くにある青木村付近を歩きまわりました。そして大林寺の僧侶から、小田山の麓、健福寺の裏に適当な場所があることを教えてもらい、その鞍見山の地を隠棲の場所と決めました。俊益五四歳の時です。

しかしすぐに隠居という訳にはいかず、俊益は心の中で「鞍見山幽斎記」を作って、隠居の希望だけを述べました。

そして保科正之公に命じられていた「通鑑綱目の抜書」を完成させ藩に提出したり、先祖の家系を伝える「山内天正記」や「山内横田系譜」を著したりして約八年間を過ごします。

六一歳の時には妻の服部氏が他界したので鞍見山の奥にある大窪山に葬りました。その為、俊益はにわか淋しくなり不自由になりました。それを案じた娘達は父を案じて桂林寺の屋敷を売り一ノ丁にある父の屋敷に移してきました。

翌年、六二歳の時に隠居の願いが許され、三百石の禄と外様番代の職は息子の俊晴に譲る事ができ、俊益はようやく自由の身となりました。正之公もそうでしたが、当時は隠居をするのも上司の許可が必要で一苦労だったのです。

こうして天和二年（一六八二年）俊益六三歳の時に小田山の麓に畑四段歩を借り、山房の工事を始め、ついに「鞍見山山房」は完成しました。それから俊益は山房に往来して独りを楽しみ、ある時は吟詠し、またある時は杖をついて小田山に登り、溪流に遊び、山房一二景の詩を作り、春花秋月と風雅を愉しみました。

山房で唯一の不自由は、高台で井戸が無いことでした。村人に頼み掘ってもなかなか水は出ません、人々がここには水脈がないから無理だという、俊益は黙禱して、

「昔、漢の広利は軍卒が渴したので、剣で山を刺して寒泉を得、空海は老婆が塩の無いのを憐れんで塩水を得た、と聞いている。我が才識は及び難いが、平常勉強している誠意

は、異なることはあるまい」と言つて、柴門の東を三m掘らせたと清水ができました。村人は大層不思議に思ったそうです。元禄四年（一六九一年）七月一七日、俊益七二歳の時のことでした。この井戸はその後の干ばつの際一度枯れかかりましたが、更に深く掘るとまた良水が湧き、その後は枯れる事はなく水不足は無くなり、村中の男女も来て汲むようになったそうです。

まるでエリクサー浄水器を開発し、まほろば店舗では水が無償で分け与えている宮下社長にも通じるようなエピソードですね。

元禄一三年（一七〇〇年）七月一四日、八一歳の時、俊益は急に目まいがして倒れ床につき、それから再び立つことはできませんでした。

そして二年後の元禄一五年（一七〇二年）正月の二日、長男の俊晴は諏訪神社と健福寺に新年の祝賀を述べるとその足で山房を訪ねました。俊益は左右に助けられて新年の盃をあげましたが、四日は衰弱が甚だしくなり、ついに六日の午後十時に机にもたれたまま息を引き取りました。享年八三歳、遺骸は二十二日の夕方、小田山と地続きの大窪山の頂上に葬られました。

山房は葬儀を執り行うには手狭でしたが、俊益が晩年の二〇年を過ごし大層愛した場所なので、魂はここ



田中玄宰の墓所

を去る事を好まないだろうという事で、葬儀はこの山房で執り行われました。そして兄弟たちは三年間、父の霊をこの山房で祀ることを決意したのでした。

俊益が住まいしたこの小田山の頂上にはかつて俊益に侍講となるように説得した大老・田中正玄の四世子孫である家老・田中玄宰も眠っています。

田中玄宰は財政、産業、軍制、教育など藩政の全てにおいて改革を断行し、藩校・日新館を創設した名家老でした。文化五年（一八〇八年）、ロシアの攻撃に備えるため、約千六百名の藩士とともに樺太警備にあたり（前回ご紹介した会津藩の北方警備任務です）、その活躍は幕府をは

じめ諸藩から絶賛を得ましたが、同年、樺太にて死去しました。

享年六十一

歳。「我が骨は鶴ヶ城と日新館の見えるところに埋めよ」との遺言により、墓はそれらを見渡せる小田山の山頂に設けられたのでした。

この小田山は風光明媚で会津地方を見渡せる願望良好の地として、かように俊益や田中玄宰、そして多くの会津人達から愛され親しまれますが、それが為、戊辰戦争が起こった際は西軍に占領され、この小田山から発射されたアームストロング砲弾が、鶴ヶ城を破壊する事になるのは何とも皮肉としか言いようがありません。

俊益が作った山房十二景詩のうち、ちょうど今の時期をうたった美しい漢詩がありますのでご紹介いたします。



小田山からの眺望。中央付近に鶴ヶ城が見えます

鞍見紅葉

山勢徐に來たりて
綿の容

青紅界破れて 嶺頭の松
余人多く愛す 繁花の地
幽僻の楓林 独り自ら
濃かなり

会津若松市では、十月下旬から十一月上旬頃に紅葉が見ごろを迎え、お城がライトアップされます。きつと俊益さんも田中玄宰さんも、小田山の頂上から鶴ヶ城と会津の美しい町並みを見守っていることでしょう。



会津のほおずき市

現代の会津案内に戻ります。昨晩に引き続き、この日もルーチェで夕食をいただく事になりました。今夜は会津の『ふるさと街づくり』で、内閣総理大臣賞を受賞した山口ご夫妻も一緒にすることになりました。

※山口夫妻が合流する事になった経緯は宮下社長のまほろば創業三十二年周年記念『恩讐の彼方に』に詳しくご紹介されています。ぜひお読みください。

大町札の辻は、ほおずき市が開催され出店が立ち並び、昨夜とはうって変わってものすごい人込みになっていました。

ちなみに次ページ写真の左側に見える白い建物の場所が、横田俊益の生家があった場所です。



ルーチェ前で山口ご夫妻と



今夜もルーチェの食事は美味しく、楽しい夜はあつという間に更けていきました。

私はちよつと中座させていただき、ほおずきを買う為に通りにでました。残り三個になっていましたが無事に会津のほおずきを買うことができました。

七月十日の今日は、東京の浅草寺でも有名なほおずき市が開催されているはずですが。

私は以前、浅草寺のほおずき市である勉強会に参加したことがあります。その時に、「ほおずきは法好き、つまり勉強好きとも読める。ほおずきは勉強のシ



ンボルである」と教えていただきました。

勉強好きとはまるで、保科正之公や横田俊益さんのようですね。

私は物心ついた頃から、この宇宙はどうして存在しているのか、自分はどうしてここにこうして存在しているのか、そして宇宙は、人は最終的にどうなっていくのかという「宇宙の真理」のような事を常に考え続けてきました。

これはきつと私だけでなく、人間の根源的な問いであり、誰もが潜在的にあるいは顕在的に抱えている疑問なのだと思います。

保科正之公は晩年に至るまで神道を尊信し、吉川惟足^{よしかわこれたり}を師として卜部^{うらべ}神道を学び、道の奥義を極められ「土津（はにつ）」という霊号を奉られ、死後は猪苗代湖のほとりに土津神社の祭神として祀られました。

土津の意味は「土（はに、つち）

は宇宙構成要素の根本であり、万物の始めと終わりであり、信実の主体」で、その奥義を正之公は体得され、また公は会津の領主であるから「津」という字に無関係ではない、ということ吉川惟足より

「土津」と命名されました。言い換えれば土津とは「宇宙の万理を究められた会津藩主の意」となるそうなのです。正之公は宇宙の真理を究められたのですね。

また横田俊益の父・俊次は俊益にこう言いました。「学べば近くの人は道を知り、遠くは天地の理を極め得るので、人生の至楽といわねばならない。」

俊益の人生はまさに勉強と教学の連続だったように思います。俊益さんは天地の理・宇宙の真理を、あの鞍見山房で体得したのでしょいか。

お二人の足元にも及びませんが、私も失明しても病床にあつても死の直前まで歴史の講義を聞き続けた正之公のように、机に寄りかかって亡くなった俊益さんのように、ほおずき（法好き・勉強好き）の人生を貫きたいと思いました。

そしてあの世に帰つたら、末席の末席でよいので、正之公からは道の奥義を、俊益さんからは通鑑綱目の講義を聞かせていただきたいと心から願っております。

「我が生の願いはここに
みちのく

土津の神の
ほおずきの道」

「鞍見山 稽古の道を
たどり行き

天地の法は
何か尋ねん」

長文をお読み下さいますと、ありがとうございます。

次回は宮下社長の奥様の二本松講演会と福島沿岸部の状況などをお送りしたいと思います。

平成二八年十月二十一日

大橋 しのぶ



●著者プロフィール 大橋しのぶ

寺田本家23代目当主故・寺田啓佐さんとの出会いにより、蔵の微生物をテーマにした小説を書き、小冊子を発行することに。ペンネームで発表した小冊子作品は5作になる。2015年、まほろば社長宮下周平と共にルーツ探しの旅の案内人として同行。神奈川県在住。